

アンダンテラルゴの第3章は 革新の接点对策

独自開発のオーディオラック「リジッドテーブル」「リジッドタワー」や、スパイクマウントの「サイレントマウント」等、革新的なオーディオアクセサリを開発し続けるアンダンテラルゴ。そんな同社からその第3章を迎えるべく画期的なアクセサリが登場した。その名もTMD (Trans-Music Device)。接点クリーニング・拡張剤とジャンル付けされた同アイテムは、この秋に突如として登場し、そのあまりの音質効果の高さから、「オーディオアクセサリ銘機賞2018」において最高賞にあたるグランプリに一気にかけるのぼってしまった。その正体はいかに? 福田雅光氏をはじめとした、4人の評論家による体験レポートをお届けすることにしよう。

Photo by 田代法生



Andante Largo Trans-Music Device

「TMD-10」(10ml入り) = ¥16,800、「TMD-20」(20ml入り) = ¥26,800
※ Polish+Polymerの2本1組 / 税別



使用法

ステップ1

Polish (接点磨き)

少量を綿棒やキムタオル等に浸し接点を磨き、終了したらきれいに拭き取る。次回、3~6 カ月ごとの定期メンテナンスではステップ2のポリマー処理だけ行えばいい。

ステップ2

Polymer (接点拡張剤)

少量を綿棒に浸し、端子の金属部分にのみ塗布。10分経過後は、綿棒やキムタオルで入念に拭き取り完了。※電源ソケットやプラグに使用した場合、十分な効果が発揮されるまで約24時間以上を要す



接点をポリマー液で安定化 前例のないほどの音質効果

「トランス・ミュージック・デバイス(TMD)」は、ポリッシュとポリマーの2液で構成されるオーディオ専用開発された接点クリーナー。拡張剤である。ポリッシュ液は、汚れのひどい磨きや下地クリーナーとしての役割を持つ。綿棒を使い接点に塗布して、しっかりと拭き取る。後に無添加電子接点洗浄剤(スリーポンドPANDOD9D)で洗浄するものもよい。試しに裸線が黒く変色したケーブルを磨いてみた。瓶に付属するスポイトから直接塗布し、2度処理するとかなり銅色が現れてくる。確実な洗浄効果が確認できた。ポリッシュ液の次にポリマー液を使用するが、汚れの少ない状態の接点でならば、ポリマー液から開始してもいい。塗布後10分程度できれいに

この「TMD」で最も注目すべき点は、この種のクリーナーとしてありがちな副作用が大変少ないことである。SN比や解像度が高まり、コントラストが強化される。また中低域が明確になり、ゲンピングも強化。輪郭描写の正確さや繊細な高域特性など、ほとんど前例のない作用を發揮する。なお、主成分にはカーボン

**ここまで副作用のない
クリーナーは存在しない**

拭き取り、すぐに接続することが可能であるが、RCAプラグでのテストでは、完全に効果を發揮するには3〜5時間必要であった。クリーニングの初期状態では主に中域、高域のSN比や音の純度が驚くほど変化するのだが、さらにその先の効果があつた。時間とともに中低域の力感が溢れ、低域の分解力が際立ってきたのだ。



Text by 福田雅光 Masamitsu Fukuda



綿棒での塗布事例

XLRメスには ① 縦横 綿棒
XLRオスには ③ 文 綿棒 2本合わせ
RCA プラグには ② 中細 綿棒 2本合わせ

「TMD-10」と「TMD-20」には綿棒とキムタオルがサンプルとして付属する

系の接点導通剤は含まれない。このポリマーは金属表面のミクロンの凸凹や隙間に浸透し主成分が凝固することで接触する実質面積を拡張、安定化させる。これも前例のない手段であると言える。

**オーディオ接続経路の
全ての接点で効果を發揮**

用途としてはRCAプラグ、ジャック、XLR端子、電源プラグ、デジタルケーブル端子・USB端子・アナログ系接続部、スピーカーの入出力端子、Yラグ、バナナプラグ端子など、オーディオ接続経路のあらゆる部分で使用することが可能だ。作業のしにくいXLRのメス端子などでは極細綿棒を使い、時計回りに抜き差しする。また、壁コンセントのスリット部の処理では、中綿棒をラジオペンチで平らにつぶして使う方法もある。クリーナー液は熱に強い真空管アンプのソケットにも適している。

評論家が体験するTMD(Trans-Music Device)の効果



林 正儀
Masanori Hayashi

二度塗りですらに効果が上がる 死んだ音と生きた音ほどの違い

いま改めてこうした液を使ってみると、効果は大丈夫なのか……。半信半疑なところもあったが、見事にふっとんだ。TMDはのけぞる変化というべきで、接点ロスや歪みが今日までいかに悪さしていたのか思い知る。

平面的でちんまり固まっていた音がほぐれて断然表情豊かになり、のびやかに広がった。枯れかかった草花が息を吹きかえすというか、瑞々しさに溢れかえる。大袈裟ではあるが、死んだ音と生きた音ほどの違いだ。細胞の末端まで音楽の喜びや生命力がゆきわたるようである。ケーブル導体の差よりも、プラグの影響がとてつもなく大きいのではないかと。TMDでメンテをすると如実にそれを体感する。二度塗りすればさらに効果が上がるので、ぜひ試して欲しい。読者にお薦めしたいのはオーディオ全般だが、特にカートリッジやトーンアーム周辺、そしてビンテージ機器を含む真空管アンプなど興味深い。



鈴木 裕
Yutaka Suzuki

空気に音像があるなんて 初めての経験をもたらす

自宅ではまだ5セットのRCAインターコネクの端子にしか処理をしていないが、取説の通りに作業をすることがまず大事だ。その上で、2度塗りするやり方がある。取説の「ステップ2」を2回繰り返すことになるがその効果も驚きだ。

音は何かもう抜本的にいい。端子をきれいにすると音がすっきりして好きじゃないという人がいるが、それはTMDを使ってから発言してほしい。ひとつの音だと思っていたものが5つの要素から成り立っているのがわかったり、演奏上のノイズがたたくさん聴こえてきて、音が繁茂してくる。気持ち悪いほどいい。録音している場所の空気が見えてくるなんて初めての経験である。空気感ではない。空気に音像があることをTMDによって初めて教えられた。うちのオーディオのすべての端子に処理しようと思っている。



井上千岳
Chitake Inoue

最初の鮮度が確実に復活して グレードが上がったような感覚

接点復活剤やクリーナーには、確かに鮮度は上がるが音が変わってしまうなどの副作用を持つものも見受けられる。一長一短というところだが、このTMDにはそれがない。音調が変質することはなく、最初の鮮度を復活させてくれる。しかもその度合いが大きいので、グレードが上がったようにさえ感じられるのが興味深い。

また長期にわたる品質の持続も確認されている。塗布した後で液剤を拭き取ってしまうため、余計変質することがないのだろう。これも従来なかなか得られなかった特質である。

鮮度が上がることは、情報量の増加につながる。ディテールが深い底から湧き上がってくるため、表情や表現の陰影が濃い。音楽の実体感が高まって楽器や声の存在が明瞭になるように、繊細な再現力の向上が目覚ましいのである。

●注目の最新アクセサリ紹介

接点革命

アンダンテラルゴの新アイテム「TMD」 その魅力を評論家とユーザーが語り合う



アンダンテラルゴは、独自開発のオーディオラック「リジッドテーブル」「リジッドタワー」や、スパイクベースの「サイレントマウント」等、革新的なオーディオアクセサリを開発し続け、着実にファンを増やし続けているブランドである。そんな同社がその第3章を迎えるべく画期的なアイテムを開発した。それが今回紹介する接点クリーニング・拡張剤「TMD (Trans-Music Device)」である。その絶大な効果は瞬間に認知されることとなり、弊社が主催する「オーディオアクセサリ銘機賞2018」において、最高栄誉にあたるグランプリを獲得。大きなブームを迎えつつある。そこで本誌では特別企画として、同アイテムの実力を高く評価する2人の評論家、林 正義氏と鈴木 裕氏が登場。アンダンテラルゴの試聴室にて、「TMD」の開発者である同社代表の鈴木 良氏にインタビューをしつつ、その魅力を語り合う。さらに特別ゲストとして「TMD」の効果をいち早く体験したオーディオファンである高橋潤さんも来社。その実体験をたっぷり語っていただいている。



「TMD-10」と「TMD-20」にはサンプル用の綿棒とキムタオルが付属する

Andante Largo Trans-Music Device

「TMD-10」(10ml入り)=¥16,800、「TMD-20」(20ml入り)=¥26,800 ※Polish+Polymerの2本1組/税別

WEとLINNから学んだ 接点ゼロの音の世界

林 まずは今回発売されました接点クリーニング・拡張剤「TMD (トランス・ミュージック・デバイス)」の開発に至るまでの経緯をお聞かせください。

鈴木良 接点による音の劣化については、昔から個人的にもすごく気になっていました。それはさかのぼること1990年頃、自分でオーディオ販売店をやっていた時代です。その頃はウエスタンの46(205D)や86(300B)のアンプを主に使っていました。1926年から37年くらいまでしか製造されなかったオリジナルで、その他のアンプもすべて真空管でした。

ところが少し前に、LINNが最初のプリとパワーアンプを発表しました。小型のトランジスタアンプだったのですが、悔しいほど音が良かった。

それで、ここからが本題になりませんが、そのLINNの初期のアンプの音が抜群に良かった要因のひとつに無接点設計があったのです。このアンプを最初に設計したビル・ミラー氏のポリシーは、信号が入ってから出るまでのメカニカル接点をゼロにすることだったのです。

一方で私が使っていた真空管アンプは接点だらけです。LINNのアンプで接点の重要性に気付かされた私は、真空管の脚やソケットを磨いていきましたが、その接点の数たるや、すごいものがあります。

ようやくこれらの接点を全部磨くと、それは素晴らしい音がしました。LINNの初代機でもさすがに敵わない。ところが、1週間くらい経つと元気がない、嫌な音になってしまいい、もはや聴いていられないレベルです。で、もう一度磨き直すと、また素晴らしい音になる。でもこんなことを繰り返しては行かないのです。それで私は15年以上愛用してきたウエスタンの真空管アンプをすべて手放してしまいました。

300Bがどうかとか、274がどうかという以前に接点をおろそかにしていたら話にならないということをもその時に実感したのです。このことがまさに私の接点問題の原点になる経験でした。

効果が持続してくれる 接点クリーナーを追求

林 ここから25年後の時を経て、ついに「TMD」を開発したわけですね。

鈴木良 そうですね。きっかけは3年ほど前にオーディオ評論家の福田雅光先生のお宅にお邪魔した時のことです。弊社で取り扱っている英国のケーブルブランド、コード・カンパニーの新製品をご試聴いただきたくて、お持ちしたのですが、「鈴木さんのところのケーブルは端子を磨いてから持ってきましたか？」と質問されたのです。

そしてその時に接点クリーナーとして、福田先生自身が愛用しているスリーボンド社の「バンドー」を薦めてくれて、さっそく取り寄せまし



写真左からTMDユーザーの高橋 潤さん、オーディオ評論家の林正儀氏と鈴木 裕氏、アンダンテラルゴ(株)の代表である鈴木 良氏

た。それまで接点はアルコイルで磨いていたのですが、効果がどう違うのかを比較することから、再び接点対策への意欲がわいてきたのです。ここから「TMD」の開発のスタートになります。まわりのいろんな人に接点の悩みを打ち明けていったのです。

「せめて3カ月くらいは黙って聴かせてくれよ」と思いましたが、当初はどんな手段で接点対策を行っても2日、3日経つとほとんど音が悪くなつていく有様でした。一週間経つと聴くのも嫌な状態になってしまいました。

他の市販の製品もいくつか試しましたが、今度は塗った途端にもっと音が悪くなる。塗らない方が良かったという製品もありました。

そんな時、ある友人を通して、ケミカルの先生を紹介してもらいました。オーディオ関連の方ではないのですが、かつては電気系で最適な溶剤を調査したこともある人物で、そ

の時のノウハウを思い出していただきながら、まずはサンプルを作ってもらいました。

結果的にそのサンプルから「TMD」に至るまでの時間はそんなにかかりませんでした。もちろん最初からいいものではできませんでしたが、調合の仕方などの実験を始めたのがいまから2年前のことです。

林 どんな実験だったのでしょうか？

鈴木良 コード・カンパニーの高峰「コードミュージック」のXLRケーブルを全く同じロットで5セット用意し、どの調合のものが音がいいのかを実験していききました。2年間の後に各種の実用テストや13カ月のテストでも全く劣化がないことを確認しました。

後でこの対談にも合流していただき、近所にお住まいの高橋潤さんにも試していただきました。1カ所やっただけでかなりの効果を認めていただき、レビンソンのアンプを使つての4ウェイマルチをやっている方なのですが、とまらなくなつてしまい、全部の接点に「指が痛いよ」と言いながら処置していただきました。

ミクロン単位のパウダーで500通り以上から厳選

林 そもそも「TMD」の成分はいったいどんなものなのでしょう？

鈴木良 私どもはポリマーと申していますが、辞書を調べていただければわかりますが、ポリマーという言葉はその定義の範囲が広すぎる。

複数素材の化合物は何でもかんでもポリマーと呼ぶことが多いのです。ミクロン単位のパウダーを調合したものののですが、細かく数えていくと500通り以上のパターンになるそうです。そのなかからオーディオ用としてベストなものを選んで製品化したということです。

アナログやスピーカー端子等振動の多い接点で特に効果的

林 ジャンル名としては接点クリーニング・拡張安定剤という名称がついていますが、これは聞いたことのない言葉ですが、実際に接点にどのような効果を及ぼすのでしょうか？

鈴木良 金属も木もそうですが、表面を本当に拡大してみると、完全に平らなもの世の中には存在しません。ある程度平らにするにはメッキも効果的ですが、ただ、良質なメッキでも実は穴だらけだったりして、その奥にある金属の塵やサビがメッキの隙間から表に出てくることもあります。

それだけでなくケーブルの端子とこの外観が立派に見えても、端子同士が接触している部分は指の爪先くらいしかありません。それは例えば、軽石と軽石を併せたら一体どれだけのパーセンテージの面積が触れているのかを想像していただければわかると思います。

その隙間の部分を埋めるのが「ポリマー」の役割です。隙間があるとすることは当然、抵抗値があるという事です。太いケーブルがずつと続いて、接点の部分でパサッと切ら

れているからこそ、この部分の抵抗は結構高いものなのです。ですからその触るところを拡張して密度を高めることによって、大きな音質効果を発揮するものと考えています。

林 具体的にどの部分の接点で最も効果を発揮しそうですか？

鈴木良 いちばん効果があるのはカートリッジのリード線との接点部やコネクタ、それからスピーカーの入力端子です。これらの部分は同じ接点でも、特に振動による接点ひずみがいちばん多い場所なのではないかと考えています。マルチウェイスピーカーでしたらスーパートウィーターがいちばん効果があらわれます。それもスピーカー側の方の接点で試していただければ、「TMD」の有無の差がよく出てくると思います。

林 オーディオ用の接点クリーナーの類はジャンルとして歴史もあるし、これまでも非常に多くの製品が出てきています。接点の金属の部分の凸凹を埋めるという話もその度に何度も出てきて、ブームを作ってきました。でもそれらは一過性で定着しなかったという経緯があります。

今までと全く違う音質体験接点を見直す絶好の機会

林 オーディオ用の接点クリーナーの類はジャンルとして歴史もあるし、これまでも非常に多くの製品が出てきています。接点の金属の部分の凸凹を埋めるという話もその度に何度も出てきて、ブームを作ってきました。でもそれらは一過性で定着しなかったという経緯があります。

定期メンテナンスは「ポリマー」のみで十分

林 確かに今回の「TMD」は持続性という部分が大きき特徴になりますね。

鈴木良 先日お客様から「一度塗

システムの最大の弱点である接点を征する者は音を征する



アンダンテラルゴ 鈴木 良 Ryo Suzuki

従来の接点クリーナーを払拭 全く新しいジャンルのアイテム



林 正儀
Masanori Hayashi
(インタビュアー)

「つたら永久に持続するのですか？」
「という」質問をいただきました。このなかに含まれている成分は、もともとは鉱石なので、基本的には半永久的なものです。ただし、表面はあくまでも金属です。金属は空気中にさらされる限り、酸化したり油脂により汚れる。この問題が接点を侵していきます。接点と接点の間は所詮隙間だらけだという理屈でいうと、空気が滞留し、酸化や油脂の汚れがそこに当然ついてくるのは免れません。」

「TMD」は何もしない、無力です。成分を変えてコーティング力を高めることで、酸化や油脂から守ることも可能かもしれない。でもそれと引き換えに音が悪くなってしまうたら、何の意味もないわけです。ですから「TMD」は金属の表面にできる限り余計なものを一切つけないような成分にしています。ですから定期的なメンテナンスが必要になります。」

情報が正しく伝わる 真空管でも効果が絶大

林 さて、ここからは「TMD」の実際の効果ですね。ここでいよいよ鈴木裕さんに登場していただきます。ご自身の体験談をお聞かせください。

鈴木(裕) 接点の重要性に関しては、昔からすごく良く知っています。なぜかという、僕はカーオーディオの仕事で20年近くやっているので、最近のAVナビの音があるのすごく良くなっている。これはCDレシーバーからパワーアンプまで完全一体型のもので、今やこのジャンルの製品はとんでもなく音がいい。ホームオーディオなら100万か200万のシステムかといつてもいいくらいの性能です。まさに情報量の正しい音です。これにはいろんな要因があると思いますが、接点がないというのが大きなポイントになるのでは

はと思っています。全部一体になっていますから。
そこで一体型のメリットを体験してしまつたので、ホームオーディオのシステム同士を組み合わせる際も相当いいケーブルを使わないと、いい音が出せないというのが僕の常識だと思っています。でも皆さんに50万円や100万円のケーブルを薦めるのはなかなか難しいし、どうしたものかな？とずっと悩んでいました。ところが高いケーブルを買わなくても、接点対策がその夢をかなえてくれるということ、この「TMD」が教えてくれたのです。
林 「TMD」はどの部分で試してみたのでしょうか？
鈴木(裕) まずうちではRCアインターコネクトケーブルの5セットで試しました。そのなかで特に「ポリマー」を1回処置したものと2回処置したものとの聴き比べもしました。やはり最大の特徴は音質を変えるときか、帯域バランスを変えるときか、コクが出るとか、高域が艶っぽく出るとか、そういうことではなくて、情報が本当に正しく伝わっているのだなということ。いままでいかに接点で欠落した音を聴いていたということが分かりました。情報が5割くらいしか伝わっていなかったのでは？という感じです。それが「TMD」の効果の最大の魅力ですね。もとのソフトってこんなにいい音していたのか？とか、こんなに演奏会場のノイズが入っていたのか？とか、あといちばん驚いたのはコンサートホールの空気が音像としてこんな

いかに接点で欠落していたか 5割しか聴いていなかった



鈴木 裕
Yutaka Suzuki

なに見えるんだ、ということ。林さんもうなずいています。本当に見えますよね？こんな経験は初めてといつていいくらいの驚きでした。

次に使用したのがパワーアンプの真空管の接点部です。うちは845のプッシュアップで前段が300Bで、整流管を2本使っているのですが、その脚の部分を全て「TMD」で処置しました。たちまち情報がスルスル通ってききましたね。力強くなるとかそういうことではなく、情報が正しくなり、本来持っているエネルギーというか、すごくいい低音が出るようになりました。

鈴木(裕) いちばん最近ではCDプレーヤーで使用している電源ケーブルで試しました。まず1回処置をして聴いてみましたが、4〜5時間で音が変わりました。さらに5日から1週間低音が出てくるようになって安定しました。そこまでいって効果がはつきり確認できたので、今度は2度塗りを進めるようにしています。電源ケーブルの効果は、位相がすごく合ってくるというか、定位の前後がきれいになるとか、音像が荒れなくなるとか、情報自体が良くなるのが確認できました。いまのところそこまでですが、それでも十分の効果です。

「ポリッシュ」の洗浄能力も高い 金属部分を傷つけることない

林 我が家でも真空管の脚の部分で試しましたが、汚れ自体も目視でわかるくらいきれいになりました。

鈴木(裕) そうなんです。僕も「バンドー」できれいに掃除したあとに「ポリッシュ」で磨くのですが、その時の綿棒の汚れ方が本当にすごい。ですから「ポリッシュ」の威力もすごいと思います。

鈴木(良) 「ポリッシュ」の成分はかなりきめ細かいので、金属を傷つける心配もありません。

鈴木(裕) それから「ポリッシュ」が終わった段階で拭き取るのですが、そのあとの端子の質感が明らかに違うのがわかります。音を聴く以前に「あれ、これって違う感じになっているよなあ」ってわかりますから。洗浄能力もかなり高いと思います。

林 直熱管である300Bはピンが4つあります。それをいっぺんに処理しないで、まずはフィラメントの部分だけで試してみました。フィラメントだけでも効果はかなり高いですね。ここは直熱管の電流を流して電子を出す部分なので絶大な効果です。非常にきれいになります。その筋のマニアの方も試しがいいかあると思います。

鈴木(裕) 真空管をやっている人は



アンダンテラルゴの新アイテム「TMD」
その魅力を評論家とユーザーが語り合う

使用方法

—クリーニング時はすべての機器の電源を切り、電源ケーブルを抜いて下さい—

Step 1 Polish (接点磨き)

少量を綿棒や紙(キムタール)等に浸して接点を磨き終了したらきれいに拭き取ります。ふき取りにアルコールやスリーボンドのPANDO等を使うとより効果的です。(次回からの定期メンテナンスは、Step 2のポリマー処理だけを行って下さい。)



Step 2 Polymer (拡張安定剤)

少量を綿棒に浸し端子の金属部分のみ塗布します。機器に過剰の塗布をすると故障の原因となりますのでご注意ください。10分経過したら、綿棒やキムタールで入念に拭き取り完了。この後すぐに接続して使用可能ですが、TMD効果は2〜3日後最大限に発揮されます。



Step 2+ Polymer (再塗布)

ポリマーは一度の塗布・拭き取りでも大きな効果が得られますが、30〜60分後に再塗布・拭き取りをすることで、その効果をより一層高めることができます。

また、機器のポテンシャルを最大限に保つために、ポリマーによる3〜6か月ごとの定期メンテナンスをお薦めします。これにより接点表面の自然に付着する汚れを取り除き、最善の状態を保つことができます。

綿棒の使い方と注意点：キャノンプラグやスピーカーのパナ端子等のメス側の狭い穴に綿棒を挿入する際、綿棒の繊維が内部に残ってしまうことがあります。これを防ぐため必ず、綿棒は右方向(時計回り)にのみ、回転させながら抜き差しを行って下さい。



メーカーが提示するTMDの使用法について

こういう塗りものは以外と敬遠する。なぜならばゴムが溶けたり変質してしまったりする可能性があるから。でも「TMD」の場合、金属の部分だけ塗って全部拭き取ってしまいうので、そういうマイナス要因は一切発生しません。そういう意味でも薦めやすいですね。

「TMD」は熱にも強いので、ワインテージや電源にも最適。林「TMD」は基本的に熱にも強いという特徴もありますね。そういう意味でも真空管やワインテージも、電源部でも安心して使用していただける製品です。「TMD」はユーザーに色々な発見があると思うので、今後はいろいろな使用例をお聞か

せたいですね。鈴木裕 あとはオーディオのケーブルをテストする際に、「TMD」を処置したものとしらないものではグリードが全然違ってきてしまっていますから、これは今後どうすればいいのかわかりません。それぐらいポテンシャルが違ってきますから。

鈴木良 今日いちばん申し上げたいのは、システムのなかでいちばん弱い部分を改善することが、いい音への近道だということです。ケーブルの良し悪しも大事ですが接点対策だけで、ものすごくレベルを上げることが出来る。すでに高いパフォーマンスを持っているシステムが何倍にもよくなることをアピールしたいです。そういう意味で「TMD」は魅力があると思っています。

林 それは本来のケーブルの実力が高ければさらによくなることを意味していますね。それはそのケーブルを愛用している本人がいちばん強く感じるのだと思います。鈴木裕 音調を変えるのではなく、情報量だけを増やしてくれるわけですから、ケーブルメーカーさんにとってこんなありがたいアイテムはないと思います。

塗り物系は苦手ながら劇的な効果に驚愕する。林 さて話が盛り上がってきたところで、ご近所にお住まいの高橋潤さんがいらつしやいました。本誌「レコード悦楽人」にも登場いただき、JBLをベースにしたマークレビンソンによる大型マルチチャンネル

ルシステムで大音量のロックサウンドを追求し続けている方です。「TMD」を試された経緯をお聞かせください。高橋 「TMD」は鈴木さんが持つて来なくてもいいのに、持ってきたんですよ(笑)僕はもともとああいった塗り物系は信用して無かったのです。いままでの製品はだいたい、チヨコチヨコって塗って「音が変わりました」という製品ばかりでしたから。それが一般のオーディオファンの本音だと思いますよ。でも鈴木さんがあまりにも熱心に説明するので、まずはアンダンテラルゴさんの試験室で試験したのです。そこでパツと聴いただけでもはつきりと分かりました。出足からケーブルがランクアップしたみたいな効果がありましたから。

林 ここで効果があったので、ご自宅でも試したわけですね。高橋 そうですね。接点が多くて大変で、先日は1日かけてやりました。もう足腰がガクガクになりましたよ(笑)鈴木さんが最初にうちに「TMD」を持ってきてくれた時にはEMTのアームとカートリッジの接点のところを処置してくれました。それでビックリしてしまいました。確かにこの部分が良くなるのは分かっていたのですが、ちょっと良くなるのではなく、劇的に良くなりましたから。そして次にフォノイコまでの

ケーブルの接点で試したら、やっぱり劇的に違いました。「なんだこれは？」と思いましたね。それでやめられなくなって、結局スピーカー端子まで全てやらなければ気が済まなくなりました。林 その時、高橋さんに試していただいたのは効果が7割くらいの試作段階の製品でした。それでも高い効果を感じていただきました。その後で2度塗りをしていただきましたので、いまはベストの状態になっていると思います。

林 具体的にどんな音質効果がありましたか？高橋 ハンルのレコードクリナーで洗浄した時の効果と同じですね。使用前と使用後では厚いベールが1枚また1枚とはがれていくという感じ。鮮度はもちろん上がるし、滑らかになって……。EMTの硬質でガチツとした音がつややかで肉厚でふくよかになるのです。それから鈴木さんのところの製品にしては珍しく安い(笑)それでいて効果が絶大なので、まさに言うことなしです。

鈴木裕 本当にこの製品は価格的にも人に薦めやすいですね。全てのオーディオファンの夢を実現してくれるアイテムだと思います。林 本日はありがとうございました。読者の皆様もお試しいただき、使用例もお聞かせください。

ベールがはがれ、鮮度が向上
一カ所処置したら止まらない



高橋 潤
Jun Takahashi